

高らかに復活の吹奏 防火祈願で消防団ラッパ隊

「タッタタター タッタター」。勇壮で、どこか物悲しい音色が、杉木立に囲まれた神社の境内にこだましました。震災で活動を休止していた大槌町消防団のラッパ隊。新春、1月5日の消防団防火祈願で吹奏し、約2年10ヵ月ぶりに活動を再開しました。

防火祈願は、消防団員、婦人消防協力隊員ら約60人が出席し、町内の小鉾神社で行われました。碓川豊町長が「震災時に多くの団員を亡くし、痛恨の極み。復興が少しずつではあるが、目に見える形になってきた。町民が安心して暮らせる町をつくりたい」と訓示し、ラッパ隊員6人が町役場職員で副隊長の小笠原純一さんの指揮で、「観閲者に敬礼」の曲を演奏しました。

ラッパ隊は2009年に結成され、消防演習や町の式典で吹奏し、団員の士気を鼓舞してきました。活動が本格化し始めた時に震災に見舞われ、9人の隊員のうち2人が殉職し、15本あったラッパのほとんどが流失しました。



町は中心市街地が壊滅し、しばらくはラッパを吹く状況ではありませんでした。でも、もう一度ラッパを吹きたい。隊員の共通の思いでした。ラッパ隊の復活に向けては、窮状を知った東京都の「大槌町消防団を支援する会」が、ラッパの寄贈を全国に呼びかけ、隊員のラッパを確保することができました。

ラッパ隊長の岩崎伸行さんは防火祈願後、「犠牲になった隊員の思いをのせて吹きました。きっと音色が届いたことでしょう」と話しました。

漁師養成へ漁業学校開校 3泊4日で基本学ぶ

震災で打撃を受けた漁業の再興に向けて担い手を増やそうと、町は1月14日から3泊4日の日程で「漁業学校」を開校し、漁師の養成に乗り出しました。町内外から3人が参加し、定置網漁を体験したり、魚の料理法を実習したりして、漁業の基本を学びました。

この体験講座に応募したのは、町のIT関連企業に勤務する三浦健一さん(47)、愛知県岡崎市出身で遠野市に住む奈良寿昭さん(31)ら3人。

三浦さんは震災で、漁師をしていた父の夫(当時77)と母のケイ子さん(当時73)を亡くしました。奈良さんは震災直後から被災地のボランティア活動に取り組んでいます。

3人は、初日に、座学で漁業制度の仕組みを学びました。2日目には定置網漁を体験し、魚市場や大槌川さけ・ます人工孵化場を見学、ロープワークや網の修理を実習しました。3日目にはホタテの水揚げ作業をし、魚のさばき方や料理法を学びました。



講座を終了し、三浦さんは「海に心を向けることができた。漁師になることを両親はきっと喜んでくれるでしょう」と前向きになった気持ちを説明しました。奈良さんは「漁師の姿が具体的に見えてきた。都会で疲れた人たちにとって、漁師という職業は新鮮に映るのではないか」と指摘しました。

漁業学校を発案した碓川豊町長は「町に定住し、担い手になって町の活性化につとめていただければうれしい」と期待しています。

色紙手渡しミニコンサート開催 大槌中学生が応援職員に感謝

大槌町役場には全職員の約半分にあたる職員が応援職員として全国から派遣されています。その応援職員に感謝する会が大槌中学生会によって12月13日、町役場の多目的会議室で開かれました。生徒の感謝の言葉を書いた色紙や、大槌中3年生の歌手白澤みさきさんのサイン入り色紙などが応援職員手渡され、みさきさんのミニコンサートがありました。

町の職員は241人のうち115人が全国の自治体や民間企業から派遣された応援職員です。大槌中学校(鈴木利典校長、生徒282人)の生徒会による感謝する会は、単身で赴任し、仮設住宅や民間のアパートに住みながら、復興業務にあたっている応援職員を励まそうと企画されました。

感謝する会では、生徒会長の新田亮介君(2年)が「町の復興のために、朝早くから夜遅くまで働いてくださり、ありがとうございます」とあいさつ。



手渡された色紙には、生徒の顔写真入りで、「大槌の暮らしを支えてくださりありがとうございます。大槌は少しずつ活気を取り戻してきました」といった感謝の言葉が綴られていました。

静岡県磐田市からの派遣職員、学務課学校整備班の原隆秀さん(42)は、職員を代表し、「皆さんの気持ちはしっかり胸に響きました。道のりは長いですが、一日も早い復興に全力をあげたい」と感謝の言葉を述べました。

水生生物で河川の水質調査 大槌小に県から感謝状

大槌町立大槌小学校が水生生物による河川の水質調査の実績が評価され、12月19日、県から感謝状が贈呈されました。大槌小は統合前の旧大槌小の時代から、23年間にわたって大槌川、小鉾川の水生生物の生息状況を調査し続け、いずれの河川も、「きれいな水」であることを確認してきました。

水生生物による水質調査は、毎年、4年生の児童により、総合的な学習の時間を利用して行われています。今年も9月6日、67人の4年生の児童が4班に分かれ、大槌川と小鉾川で調査しました。川の中の小石をひっくり返してカワゲラやサワガニを見つけ、河川が汚染されず、清らかな流れであることを確認しました。

調査は一昨年の震災の年だけを除いて、長年にわたって続けられています。贈呈式で菊池啓子校長は「子どもたちが豊かな自然に囲まれていることを知る場になっている。震災のつらい思いを乗



り越え続けてきたことが認められてうれしい」とあいさつしました。

感謝状を受け取った4年生の小國依織さん、永井瑚夏さんは「川の中の虫たちに触ることができるかな、と心配だったが、かわいかった」「多くの水生生物がいることを知って驚いた」と話しました。